

マハトマ・ガンジーの非暴力抵抗運動 —アヒンサ（非暴力、不殺生）のルーツを探る—

野呂 浩^{*1}

A Study of Mahatma Gandhi's Non-violence —Examining the Root of Gandhi's *Ahimsa*—

Hiroshi Noro^{*1}

Gandhi's *ahimsa* means non-violence, doing no harm to anyone, and especially not to those you consider enemies. It is the fact that Gandhi lived his whole life resisting to injustice based on this behavior.

It has been traditionally understood that the Russian writer Leo Tolstoy, the 19th century American writer Henry David Thoreau (especially his famous essay "Civil Disobedience"), and the teaching of Christ (Christ's Sermon on the Mount) had influence on Gandhi's life of non-violence.

However, we have to look at another very important historical fact that he was absorbed in reading the Bhagavad-Gita throughout his life. The central teaching of this book is that the God of Bhagavad-Gita created everything and everybody, having the God's spirit within them, as a completely equal being. This view existed in the mind of Mahatma Gandhi throughout his lifetime. Therefore, we can understand that Gandhi treated enemies as completely equal with the vision of coexisting in peace, calling even the lowest caste "the children of God."

Non-violence is a trait of Bhagavad-Gita's God, which was also a clear characteristic of Gandhi himself. Therefore, it is possible to point out that the Bhagavad-Gita had the most decisive influence on Gandhi.

A certain Christian missionary in India called Gandhi "Christ in India," because he could see Christ's image in Gandhi. However, the result of examining the relationship between Gandhi and the Bhagavad-Gita leads me to conclude that Gandhi was possibly the most perfect incarnation of the Bhagavad-Gita's God. I believe this to be so because his non-violence movement was religious rather than political by nature.

I

マハトマ・ガンジーは、英國の支配からインドを独立させる上で重要な役割を果たした人物であるが、何よりもアヒンサ（非暴力、不殺生）による抵抗運動に生涯を捧げた改革者として知られている。

この非暴力による抵抗行為とは一体どのような特徴を持つのか。さらには、この非暴力行為・思想のルーツをも掘り下げなければ、マハトマ・ガンジーの非暴力による抵抗運動の思想的根拠のみなら

ず、マハトマ・ガンジーの実像の深みを的確に捉えることは困難であろう。

そこで、今回の考察では、まずガンジーの非暴力運動・思想の特徴を拾い、かつ、そのような運動・思想を持つに至った背景、さらには、その特性の奥に存在するであろう共通のルーツにも分析のメスを入れる。

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授
2006年10月3日 受理

II

非暴力、不殺生、という表現から、一般的に、受動的な弱々しいイメージを抱かれるかもしれないが、むしろ、自分の命が危険に曝されても、承服できない悪法には徹底抗戦する不服従の行為が、非暴力による抵抗の最大の特徴である。実際、ガンジー自身、非暴力の抵抗行為は、暴力による抵抗よりもはるかに積極的なものであり、⁽¹⁾ これは非暴力という武器である、と語る。⁽²⁾さらに、行動的な非暴力は、全身全霊をもって圧制者の意志に抵抗することであり、⁽³⁾ 非暴力こそこの世界で最も積極的な力であり、⁽⁴⁾ 決して弱者の武器でなく、雄々しい武器である、と明確に述べる。⁽⁵⁾そして、ガンジーはこの非暴力以外の武器は所持しない。⁽⁶⁾

こうした特質を備えた非暴力による抵抗行為は、悪法への服従を拒むための単なる手段だけなのか、あるいは抵抗行為そのものも目的の一部なのかをも検討しなければなるまい。

どうやらガンジーは、多様な価値観の共存を目指していたふしがある。非暴力による抵抗運動を、インドを英国の支配から独立させる目的等に用いたことは事実であるが、⁽⁷⁾ この抵抗行為は、あくまでもガンジーが、非暴力こそが、軍国主義や野心の唯一の解毒剤であると考え、⁽⁸⁾ 宗教や民族の対立のない世界、肌色や貧富の差別のない世界のビジョンを抱き、⁽⁹⁾ 暴力が獸類の掟であるが、人類の掟は非暴力である、⁽¹⁰⁾ と考える、ガンジー独特の信念・哲学の具体的なあらわれである可能性が高い。

ガンジー自身もそのことについては何度も言及している。自分は、民族や肌色や主義の相違に囚われず、全人類の友情を得るために生きてきた。⁽¹¹⁾そして、非暴力を広めることこそが自分の生涯の使命であり、その非暴力を実践する以外に生きる興味はない、とさえ述べている。⁽¹²⁾

こうした発言等を踏まえると、必ずしも英国からの独立とか、悪法を強いる側を打倒することだけが唯一の最終目的でもなく、ましてや、非暴力による抵抗運動が単なる手段だけでもないようである。

ガンジーの思想に敵という存在はない。人々、アヒンサという言葉にも、敵は存在しない、という意味合いがある。人間は平等であり、⁽¹³⁾ 等しく神性を宿しているとガンジーは看做す。⁽¹⁴⁾そしてこの非暴力による抵抗行為をガンジーは神の武器と呼び、

⁽¹⁵⁾かつ、一般の人々の魂の力こそ、いついかなる時にも一番大切なものである、とも主張する。ガンジーは、民衆の貧困、差別、搾取される痛みを知り、生涯彼らと共に歩み続けた運動家である。⁽¹⁶⁾

III

ガンジーはアヒンサ（非暴力、不殺生）を、一体如何なる場所で如何に身につけたのか。

ガンジー自身の不殺生、非暴力の生き方のルーツを探るには、まず、両親の影響を無視できない。ガンジーは高校時代に、肉を食べるとインド人も丈夫な体を持ち、イギリス人に勝てるかもしれない、などと考え始める。ガンジーの両親はヴァイシュヴァ派の信心深い信徒で肉食は一切しない。ある日、友人と一緒に川べりを歩き、生涯で初めて肉を自分の目で見る。山羊の肉は皮を噛むように固く、どうしてもそれを食べられなく、むかむかしてきたのでとうとう食べるのをやめてしまう。にもかかわらずその後の夜は恐ろしい夢に驚かされる。眠ろうとしても、生きた山羊がガンジーの身体のなかで、メイメイと泣くのである。

それでも、結局肉を食べるようにはなるが、およそ1年位続いた後、自分の両親に嘘を言い続ける良心の呵責に絶えきれなくなり、最終的には肉食を絶ってしまう。母に隠れて肉を食べた後、夕食時に母に、どうして食べないのかと聞かれて、お腹の調子が悪くて食欲がないと、断り続けることができなくなる。⁽¹⁷⁾

父に対する懺悔にもいかにもガンジーらしい一面を垣間見ることができる。あるときガンジーは兄の腕輪から金片を盗み取る。それで兄の借金を返済したのだから、何ら問題はないが、しかしながらガンジーはやがて耐えられなくなり、もう決して二度と盗みはすまいと誓い、盗みをしてしまったことを父に告白する決心をする。痔を病んで寝床についていた父に、一枚の紙片に認めた懺悔の文章を手渡す。当然、ガンジーは、父にぶたれるかと思って覚悟していたが、懺悔文を読み始めた父は涙を流し、その涙が頬を伝わり落ちて、懺悔文を濡らす。父は目を閉じ何かを考えていたが、とうとうその懺悔文を引きちぎってしまう。こうした父の対応を目の当たりにして、ガンジー自身は声をあげて泣く。父の愛の真珠の涙で、心が晴れ、罪が洗い流され、まさに不

殺生の実物教育であり、父の眞の愛を学んだ、とガンジーは自伝で告白している。⁽¹⁸⁾

この体験にも、ガンジーらしい一面、つまり、暴力ではなく、あくまでも深い愛情、絆を土台としたコミュニケーションでこそ人間が変わりうることを知るガンジーの姿が読み取れる。父、母とのこうした愛情の絆が、ガンジーのアヒンサ（非殺生、非暴力）の礎を築いた一要因であることは間違いないだろう。

しかば、父、母の影響以外に、ガンジーをアヒンサの生き方へ導き、アヒンサによる抵抗運動を生涯継続させた本質的な影響のようなものは他にはないのか。

『バガヴァッド・ギーター』は自分の行為における不可欠の指針になった、とガンジーは述べているが、この発言は注目に値する。⁽¹⁹⁾ 特に『バガヴァッド・ギーター』の第2章を思想と行動の拠り所、としていたとの指摘もある。⁽²⁰⁾

そうであるならば、ガンジーの非暴力による運動および生涯の核心部分を解明するために、インド人の倫理生活に最も大きな影響を及ぼした書、⁽²¹⁾ と言われる『バガヴァッド・ギーター』とガンジーの関わりを詳細に分析しなければなるまい。

ガンジーは、18才のときに英国へ留学して、法律を学び、21才で弁護士の資格を得る。留学中の1890年代に『バガヴァッド・ギーター』に出会い、⁽²²⁾ エドワイン・アーノルド（Edwin Arnold）による『バガヴァッド・ギーター』の英訳本を読み始める。⁽²³⁾ そして、原典を毎日、1、2行ずつ暗記し始める。原典は18章あるが、13章分を諦めてしまう程夢中になる。まさに日々『バガヴァッド・ギーター』の詩とともに生活をしたのである。中でも、第2章の次の言葉に強い印象を受けていた。

もし人が

五感の対象をあれこれ思えば、執着が生じる。

執着から欲望が生じ、

欲望は怒りとなって燃え上がる。

怒りは迷走を生み、迷走から記憶はすべて混乱する。

高貴な意志の力（知性、理知）は失われ、心は弱まり、知性も心も失われて、人は破滅する。⁽²⁴⁾

人間の五感に左右されず、知性、理知の冷静さを

失わない、強い意志の力を生涯もち続けたガンジーラしさを想起させる教えである。五感の対象に囚われないということは、この世の欲望の放棄を意味しよう。そして、これは当然の帰結として、アヒンサ（非暴力、不殺生）による生き方に繋がる。したがって、ガンジーの生きざまの本質的な特質は、この『バガヴァッド・ギーター』で教えられている生き方であることをまず押さえなければならない。

さらに、無所有（non-possession）や平等（equability）もガンジーの心を捉えていた。⁽²⁵⁾

『バガヴァッド・ギーター』は、インドの聖典で、主神（バガヴァッド）の歌（ギーター）の意。800の詩頌より成る18章の宗教詩で、紀元前2世紀頃に成立したと言われる。アーリア人部族間の戦争（バラタ戦争）に臨むアルジュナ王子が同族同士が殺し合う闘いを悲しみ、躊躇するのを、バガヴァッドたるヴィシュヌ神が人間の姿となり（クリシュナ）、正義の闘いの必要を説き、あわせて、バガヴァッド神を信仰する重要性をも教えて、アルジュナの疑惑を解き、戦場に赴かせるという内容が中心であるが、様々な宗教的教えも盛り込まれている。何世紀もの間、インド人の精神的・文化的・知的・政治的な生活に大きな影響を及ぼしてきた書だけあって、人間存在の根拠を明確に教示する。

生まれる前の状態は人間の感覚では知り得ない。誕生してから死ぬまでの間は知ることができる。死ねば再び知り得ないところにかかる。ここに何の悲しみがあろうか。⁽²⁶⁾

また、敵さえ平等に看做すことを教える箇所もある。たとえば、

友人、同志

敵、親族、悪人

誹謗者や中立者をも

同じ眼で見る者は

もっともすぐれた者である。⁽²⁷⁾

啓明を得た魂は

学識豊かで控えめなバラモンも

牛も象も犬も賤民も

すべてのものを平等に見る。⁽²⁸⁾

ガンジーは、カーストの枠外に置かれ穢れた存在として忌み嫌われていた最下層身分の不可触民をさえハリジャン（神の子）と呼んでいた。

感覚では捉えられない世界からこの世に生まれ、やがて、また、そうした世界に帰る意味でも、すべての人間、いやあらゆる生物も全く平等であると捉える。

「感覚を支配した者にとって土も石も黄金も同一である」、とも記されている。⁽²⁹⁾ 果たしてガンジーが、石、土、黄金を同一と考えられる程、感覚を支配していたかどうかを判断することは困難であろうが、少なくとも、すべての人間は、バガヴァッド神の神性を宿した全く平等な存在と捉えていたと考えないと、ガンジーがあらゆる人間に平等に接し、あらゆる差別に対してアヒンサによる果敢な戦いを挑んだ事実が説明しにくくなろう。

このような人間観、世界観をガンジーが抱いていたとするならば、無所有主義も頷けよう。人間には、自分に与えられているすべてを管理する責任はあるが、もともと自分の肉体も、他のあらゆるものも決して自分の所有物ではないのであるから。

ところで、この『バガヴァッド・ギーター』はそもそも人を殺す戦闘を否定する書ではない。ガンジーがこよなく愛したと言われる第2章の最初にも、戦士にとってそのような正義の戦い以上に偉大なものはない、とうたわれている。⁽³⁰⁾

しかしながら、ガンジーは暴力的な破壊に基づく戦闘を忌み嫌い、あくまでも人間存在の中心である精神を最重要視する人物であった。ガンジーは、たとえ敵が自分を殺しても、彼らが手にするのは自分の肉体の死体であって、決して自分の魂ではない、と考えていた。

アヒンサ（非暴力、不殺生）に関しては、この書『バガヴァッド・ギーター』はどのように教えているか。

非暴力、不動心、満足、苦行

布施、名誉、不名誉

これらの特性は

私だけから生まれる⁽³¹⁾

謙虚あれ、謙虚あれ

不殺生あれ、寛大あれ

誠実あれ、師に奉仕せよ

清純であれ、堅実であれ

自我を支配せよ⁽³²⁾

非暴力、不殺生は、『バガヴァッド・ギーター』のバガヴァッドからのみ生まれる特性であると明確に宣言されている。そして、この特性をガンジーは生涯持ち続けるのであるから、ガンジー自身の生涯が、勿論、間違いなくガンジー自身の生涯ではあるが、ガンジーに確かに宿った非暴力、不殺生というバガヴァッドの特性を眺める限り、限り無く、バガヴァッド的な存在、生涯であった、と看做すことができる。むしろ、ガンジーの非暴力、不殺生による抵抗行為、運動の核心部分はまさに、このバガヴァッド的特質そのものであった、と断じてもよかろう。

『バガヴァッド・ギーター』を読む限り、この非暴力、不殺生を武器として闘え、というような教えは見受けられないようである。ならば、ガンジー自身が、この非殺生、非暴力を神の武器と位置付けたと考えざるを得まい。

アヒンサによるこの神の武器の生き方を貫くガンジーに、現世の武器で応じる悲劇が起こる。

ガンジーの心臓をめがけて、三発発射してガンジーを暗殺した、殺人犯 ゴードセイは、ムスリムとの融和に奔走するガンジーを、ヒンドゥー教への背信と誤解した、ヒンドゥー教右翼国粹主義者だった。⁽³³⁾

ガンジーは、ことあるごとに、対立の融合を説きまわり、どのような人間でも本質的には宇宙の根源者がそもそもその存在根拠であることを基本に据えていた。つまり、ガンジーは、宗教や民族、あるいは国家の異質性のレベルで世界を捉えていたのではない。すべてを同質性から眺めていたのであり、これこそが、アヒンサ（非暴力、不殺生）の真の最大の特質である。

その方は永遠の、生死を超えた、唯一無比の存在である。その方だけを私は礼拝する。その方の助けだけを私は求める。…その方は、すべての人に等しくかかるわっている。それゆえに、イスラム教徒でもだれでもその方の名を唱えることに反対する理由がないと私は考える。⁽³⁴⁾

この方とは、永遠に存在し、全ての存在の根源である、バガヴァッド神のことである。この発言は、

1946年4月28日のガンジーの週刊誌『ハリジャン』に載っているが、まさに自分の生きざまについて、何を礼拝し、何に仕え、なぜすべての人間を神の子（ハリジャン）と看做すかのガンジーの偽らざる告白である。

私は万物の源泉であり

私から万物が生まれる

賢者はこれを知つて

心から私を崇拜する

…

彼らへの慈愛により

私は彼らの心に宿り

輝く知恵の灯により

無知の暗闇を破壊する⁽³⁵⁾

私は生まれることも死ぬこともない

私は万物の主である

私は生まれるように見えるが

それはそのように見えるだけだ

…

徳がおとろえたとき

罪悪がふえたとき

私は肉体の姿となる

聖なるものを救うために

罪を破壊するために

正義を確立するために

私はいつの時代にもよみがえる⁽³⁶⁾

んだとも言われる。

インドに遣わされていたキリスト教の宣教師アンドルーズが、異教徒であるガンジーにイエスにもっとも近い特性を見い出して、「インドのイエス」と呼んだことは誠に興味深い事実である。⁽³⁹⁾

これまでの考察からは、既に触れたように、バガヴァッド神の不殺生、非暴力という特性と、不殺生、非暴力による抵抗運動を続けたガンジーの特性が見事に重なる事実を指摘できる。

非暴力、不殺生を武器として用いなければならなかったのは、ガンジーが生きた時代の状況、とりわけ、南アフリカにおける人種差別の体験、英国の植民地であったインドの状況等も絡まっていよう。

物理的な破壊力では、英國に到底叶わないこと位はガンジーだって当然認識していたであろう。そこで、自分達の肉体が殺害されたとしても決して自分達の精神だけは相手には破壊されない固い信念をもって、相手の精神に訴える熾烈な抵抗行為、運動を展開したとも考えられる。

そして、これを神の武器と呼んだのは、これまで眺めてきた意味の神聖さも勿論あろうが、神の正義の武器とするならば誰も否定できなく、かなりのインパクトをもつ抵抗運動になるだけでなく、勝利を勝ち取るためにも最善の方法なりと読む、改革者、大衆運動家としての、人間的な巧妙さ、強かさも含まれていよう。いずれにしても、ジャングルの法则で動くかのような現実世界にバガヴァッド的な生きざまを突き付ける壮大な実験をガンジーは生涯継続するのである。

ガンジーの非暴力運動の本質が『バガヴァッド・ギーター』であることは、ガンジーが不殺生、非暴力運動に名付けたその名からも説明が可能である。

ガンジーは最初、この非暴力の闘いを、トルストイにならい、受動的抵抗と言っていた。しかしながら、精神の抵抗の意味をインド語で表現したい、との強い願いから、この運動をサティヤーグラハと名付ける。サティヤーは真理、グラハは堅持する、という意味である。⁽⁴⁰⁾

この真理はある特定の宗教や、価値観ではなく、これまでの分析からも明らかのように『バガヴァッド・ギーター』の説く宇宙の根源者、至高者のことである。

この命名からは、非暴力とか、不殺生を闘う武器

IV

一つの興味深い言い伝えがある。ガンジーが非暴力による抵抗を思いついたのは小さなロバの抵抗だった、という話がある。ロバは小さな動物だが、人間にためにいろいろな荷物を運んでくれる。雇い主が力づくで無理矢理急がせようとしても頑として応じないが、哀願するようにやさしく頼むと頷き歩き出す習性からガンジーがヒントを得たのである。⁽³⁷⁾

この他に、非暴力による抵抗を思いついたのは、妻の耐え忍ぶ涙や、トルストイやソロー（“Civil Disobedience”）などの書の影響があるとも言われる。⁽³⁸⁾

さらにガンジーは、キリスト教のイエス（特に山上の垂訓）、仏教の釈迦からも非暴力、不殺生を学

とするような意味は読み取れない。むしろ、人間存在の普遍的真理をしっかりと把握して現世に生きる、というガンジーらしい哲学、祈りが込められた名である。それゆえ、サティヤーガラハ、非暴力による行為、運動は、本質的には、政治運動、活動というよりは、普遍宗教、あるいは、普遍真理に基づく極めて宗教的な色彩の濃い行為、運動である、と解釈すべきであろう。

インド土着の価値観のようでも同時に普遍性を合わせもつ特徴がインド的価値観にあるのは、もともとインドが多様な宗教、民族、文化が混在する故、やはり普遍性に収斂していく一面があるからではなかろうか。その意味では、インドは全世界の縮図的側面を合わせもつ空間である。

そうすると、非暴力、不殺生による抵抗運動、と訳す訳語 자체がガンジーの目指した運動の、表層的な一部のみ捉えた訳語であると言わざるを得なくなろう。

このガンジーの運動は、やがて、米国の公民権運動家の黒人指導者キング牧師、南アフリカの政治指導者ネルソン・マンデラたちに引き継がれる。筆者の勉強不足で彼らが、果たして『バガヴァッド・ギーター』を熟読していたかどうかは定かでないが。

『バガヴァッド・ギーター』と共に生きる過程でガンジーは、いつの間にかバガヴァッドと、汝と我的関係を越えて、むしろ、バガヴァッドがガンジーに宿り、ガンジーもバガヴァッドと一体化したのではないかだろうか、との感を否めない。

『バガヴァッド・ギーター』に記されている、「愚かなものは 人間の姿をとった私を見過ごす」⁽⁴¹⁾という文言が筆者的心に妙に響くことを付記して筆を擱く。

注

- (1) ガンジー、森本達雄訳 『非暴力の精神と対話』 第三文明社 レグレス文庫 2001年 p.49
- (2) Ibid., p.105
- (3) Ibid., p.28
- (4) Ibid., p.34
- (5) Ibid., p.45
- (6) Ibid., p.31

- (7) Ibid., p.124
- (8) Ibid., p.126
- (9) Ibid., p.9
- (10) Ibid., p.27
- (11) Ibid., p.111
- (12) Ibid., p.107
- (13) Ibid., p.118
- (14) Ibid., p.96
- (15) Ibid., p.136
- (16) Ibid., p.98
- (17) マハトマ・ガンジー著 蟹山 芳郎訳 『ガンジー自伝』 中央公論新社 2004年 pp.38-45
- (18) Ibid., pp.49-51
- (19) Ibid., p.222
- (20) Ibid., p.479
- (21) Ibid., p.458
- (22) 武井和夫著 『真理の教え』 日本国書刊行会 1999年 p.9
- (23) Ibid., p.113
- (24) Ibid., p.113
- (25) Ibid., p.144
- (26) スワミ・プラバヴァーナンダ クリストファ・イシャウッド 共編 熊澤教眞訳 『バガヴァッド・ギーター』 ヴェーダーンタ文庫 平成16年 p.32
- (27) Ibid., p.85
- (28) Ibid., p.76
- (29) Ibid., p.85
- (30) Ibid., p.33
- (31) Ibid., p.123
- (32) Ibid., p.157
- (33) 『真理の教え』 p.233
- (34) Ibid., p.235
- (35) 『バガヴァッド・ギーター』 pp.124-125
- (36) Ibid., pp.56-57
- (37) 森本達雄著 『ガンディーとタゴール』 第三文明社 2004年 pp.154
- (38) Ibid., pp.154-155
- (39) Ibid., p.158
- (40) Ibid., pp.154-155
- (41) 『バガヴァッド・ギーター』 p.112